

# 模擬授業研究会の斉藤メモ(2020年1月15日)

授業者：〇〇

範囲：働き方と労働三法

## 主な感想・代案

- 前回と比べて準備をしたことは伝わってきました。
- 〇〇君も念頭に置いている通り、職業や労働の話は、生徒自身の人生とも密接にかかわってくるテーマです。ただ、「社会科らしい」授業をするのであれば、そういった自分の人生を射程にいれた切実性と、社会問題、や社会構造、社会制度のようなマクロな話を行き来できるような授業が良いような気がします。
- 『中学校学習指導要領解説 社会編』(2017)には、以下のように記載があります。長いですが記載します。

職業の意義と役割及び雇用などについては、勤労の権利と義務についての理解を基に、労働によって家計を維持・向上させるだけでなく、個人の個性を生かすとともに、個人と社会とを結びつけ、社会的分業の一つを担うことによって社会に貢献し、社会生活を支えるという意義があることについて多面的・多角的に考察し、表現できるようにすることを意味している。また家計を維持・向上させる上で、雇用と労働環境の改善が必要であることについての理解を基に、産業構造の変化や就業形態の変化、内容のAの「(1)私たちが生きる現代社会と文化の特色」のAの(ア)の「現代日本の特色」についての学習などに関連づけながら多面的多角的に考察し、表現できるようにすることが大切である。

その際、国民一人一人が生きがいや充実感をもって働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域社会などでの生活において、人生の各段階に応じて多様な生き方の選択・実現を選択するために、仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)という観点から、違法な時間外労働や賃金の不払いなどが疑われる企業等との間でトラブルに見舞われないための予防とするための、またトラブルに直面した場面に適切な行動がとれるようにするための労働保護立法などに触れ、社会生活における職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善について多面的・多角的に考察し、表現できるようにすることが大切である。

- この文章をざっと読んだ時、先に書いた社会問題や社会構造、社会制度のようなマクロな話が出てこないといけないと感じるはずですが。「国民一人一人が生きがいや充実感をもって働き、仕事上の責任を果たす」という話も、単に個人個人の選択という話ではなく、それができるような社会を作るべきという話になる。
- この授業は自分の人生を射程に入れている授業だと思うのですが、だとしても、個人的な関心に引き付けすぎていて、制度的な枠組みを理解できる授業となっていません。すくなくとも、目標検証シートの中核に「語らく上での自分軸」が中央に来るのは不自然な感じがします。かつ、今回の教科書範囲は、あまりそういった一人一人の人生のことを押し出した内容になっていない点も気になります。
- 仮に、個人個人の職業選択や理想を語る場面を重視した授業にするとしたら、例えば、大量の職種を列挙した資料を用意して、自分のなりたい職業を選んでもらう。その上で、各職業で起こりそうな労働災害やトラブルを書いた資料を配布し、自分になろうとする職業ではなぜこういった問題が起こりがちなのか(例えば飲食店では長時間労働になりがちとか)をお互いに共有します。
- 授業の後半では、自分になりたい職業がなぜそういう状況になるのか、どの制度を補強すればよいかを話し合っていく。その際も、労働三権の話は簡単に済ませて、具体的にどんな改善策がありうるかを選択肢(例えば、8時間以上の労働は全て違法とし、重い罰則を与えるとか)として提示し、優先順位を考えさせるような流れにした方が、考えられるように思います。
- この授業で「関心」の評価をどう想定しているのかについて、少し疑問がわきました。個人的にはこの授業は非常に生徒一人ひとりの人生と密接にかかわる問題なので、いかに「自分ごと」として問題を捉えているのかという点は、関心意欲態度の範疇に入ると思います。理解を重視するならば、関心とは言えません。

### 【コラム】理論と実践の接点

社会科においても自分の生き方を考える授業は大いにあり得ます。棚橋(2007)では、「社会の構造から自らの生き方を考えさせる授業」と題して、社会保障制度と働く仕事の関わりについての授業を紹介しています。当然、自分自身の現実の社会的状況に近づく分、切実な感じにはなるのですが、その際に重要となるのが、「自らの生き方の選択を通して、社会のあり方を批判的に分析する」プロセスです。この点が抜けるか否かで、授業の意味合いがかなり変わってきます。

【参考文献】棚橋健治(2007)『社会科の授業診断—良い授業に潜む危うさ—』明治図書